

## 特集 発達：持続と変化のイベント

発達や学習に関わる学問の根幹には「ある構造（系）にどうして新奇性が現れうるのか」という問いがある。

生態心理学における発達研究は、主として乳幼児を中心に繰り広げられてきた。Eleanor J. Gibson は、James J. Gibson の知覚論を基礎として、発達をアフォーダンスの学習の観点から検討した。学習過程をアフォーダンスの発見として捉えたその理論は、発達心理学の進展に大きく貢献した。Esther Thelen は、ダイナミック・システムズ・アプローチをもって生態心理学を進めるための具体を示してくれた。Gibson 心理学への深い洞察をもっていた Edward Reed は、ダーウィン進化論や哲学の枠組みを取り入れながら、より広い発達領域への展開可能性を示した。上記の3人は、根幹にある問いに対して実証的・理論的にあるひとつの道筋を示し、それは生態心理学内外に影響を与えてきた。

我が国でも、エコロジカルな発達研究は進められている。「変化」の意味に一石を投じたマイクロスリップは、物理学やリハビリテーション学からも注目され、豊かな議論を生み出した。ダイナミクス・システムズ・アプローチを取り入れた運動研究によって、様々な学習過程の諸相が明らかにされてきた。

本特集は、そのさらなる広がりを見出す理論的・実証的・実践的な視点を掲載し、今、改めて我が国の生態学的発達研究を盛り上げる契機にしたい。

西尾 千尋（中京大学）・青山 慶（岩手大学）・山崎 寛恵（東京学芸大学）